

## 煙突のなかの手紙

土田 拓 (COE研究員・RA) TSUCHIDA Taku

「まるで御殿のようにみえた」と周りの戦後開拓農家から形容された家がある。洋風の外観を持つその家は、北海道オホーツク海沿岸部に位置する、ある集落の農場主の母屋として1927年に建てられた。戦後になってから住人の交替が2度ほどあり、現主人は1967年頃に引き継いでいる。そうして80年近くの齢を重ねた家で、私が写真の手紙を見せて頂いたのは、2005年の冬のことだった。家の2階、ベチカの煙突のなかから出てきたというその手紙は、今の主人(1924年生まれ)が掃除の最中に見つけたものである。

2枚のkokyōの便箋上に、平仮名を中心とした大きさの不ぞろいな文字が並ぶ。あるところの句読点は省略され、またあるところではその位置が左右逆になっていたりする。打ち消し線をともなって余白部分に連なる、判読の難しい数語は、漢字の練習でもしたのであろうか。

焼却されるはずだった下書きを想像させるそのつたない文面は、仕事の斡旋を知人へ依頼している。どうやら、朝4時から夜7時までの「北海道のごと」が大変なため、東京で仕事につきたいということらしい。文章をしたためた時点での差出人の仕事について具体的に表現されてはいないのだが、農場を営んでいた家から発見された手紙であることに思いを巡らせば、家人ではない彼は雇い人として農作業に従事していた可能性が高いだろう。差出人である「彼」のこの家での立場や性別は、文中の「ぼく」という一人称や、農場主とは異なる苗字などからの推測である。

今、聞き書きするなかで触れることのできる、この地域に関しての人々の記憶のなかに彼の名は出てこない。彼はどこで生まれ、どんな家庭に育ったのだろう。どのような性格で、いかほどの身長や体格の持ち主であったか。どういった経緯でこの家へやってきて、どれくらいの期間をそれから過ごし、その間なにを考えただろう。

それらの問いかけに答えてくれるものは見当たらない。ただ手紙の存在のみが、かつて彼がいたことのよりどころとしてあり、そうした形で、明治以降に拓かれた開拓地における人々の流動性の一端が現在に顔をのぞかせる。

写真1



【凡例】

- 1) は判読不明
- 2) 括弧内は筆者による補足
- 3) 人名は英字で表記
- 4) 打消し線は原文のまま
- 5) 句読点の位置は通常的位置に訂正

「体はもたない」というほどに彼が感じた仕事量は、彼一人に限ってのことではなかった。手紙を見つけた現主人は、それくらいの仕事は当たり前だったという。冬に材木の伐出し等の山仕事に携わっていた別の男性(1915年生まれ)は、「なに俺なんかもう過労死してもんあるんだったら、10ぺんも死んでるわい」と語る。この地に住み続けてきた人々と、この地を離れていったであろう彼の境目はどこにあったのだろうか。

建てられた当時、御殿のようにみえた洋風の屋敷は、自家菜園畑や牧草地をその周りに抱えながら、今も生活の場となっている。幾度かの住人の交替を経験しつつ、屋敷とその周りの生産領域に依拠した暮らしの立て方自体は引き継がれてきたことになる。その生活の積み重ねのうちには、彼のような流動的な人々による営みも溶け込んでいるのであった。

開拓地における暮らしの様式が形成され、継承されてゆく背後にあった、人々の動きの大きさあるいは逆に、人々の流動性をまたがる形での開拓地における生活の継承性といった問題を、煙突のなかから出てきた手紙は投げかけている。